

2020年度 独創的研究助成費 実績報告書

2021年 3 月 30 日

| | | | | | | |
|---------|--|---------------|-----------------------|-----------------|----------------------------|-------|
| 報告者 | 学科名 | 看護学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 名越 恵美 |
| 研究課題 | 高齢がん患者に対する入退院調整看護師のコンピテンシーに関する研究 | | | | | |
| 研究組織 | 氏名 | 所属・職 | | 専門分野 | 役割分担 | |
| | 代表 | 名越 恵美 | 看護学科・准教授 | がん看護学 | 調査票開発, 調査, 分析, 結果の共有, 成果発表 | |
| | 分担者 | 實金 榮 難波 峰子 | 看護学科・准教授 関西福祉大学・教授 | 高齢者看護学 地域看護学 | 調査票開発・分析 調査票開発・分析 | |
| 研究実績の概要 | <p>高齢がん患者が療養生活を継続するためには、病院と地域の多機関の連携・多職種の協働が必要である。患者と家族は、退院後の基幹病院への通院、地域医療支援病院での治療および急変時の対応や入院について不安を持っている。しかし、受け入れる地域病院の看護師は、がん専門看護師・認定看護師と常時相談できる状況にはなく、治療継続や緩和ケアに困難感を持つ。そのため、患者・家族や地域の病院の状況を鑑み、患者の望む場所で療養できるよう「繋ぐ役割」は重要となる。そこで、チーム医療の中で病院と地域を繋ぐ入退院支援看護師に必要な中核となるコンピテンシーは何か明らかにすることを目的とする。これは、在宅療養高齢がん患者が地域で穏やかに療養継続を支援するための基礎資料になる。</p> <p>調査1：入退院支援に携わる看護師のコンピテンシーの構造化 研究参加者：専従及び専任の退院調整看護師 研究方法：1) デザイン：質的帰納的研究デザイン 2) データ収集方法：研究の同意が得られた参加者に対して、インタビューガイドを用いて半構造化面接を行う。インタビューは個室でインタビューガイドに沿って自由に語ってもらう。インタビュー内容は承諾を得てICレコーダーに録音した。 3) 調査内容：年齢・性別・学歴・医療職歴・職位・インタビュー内容は、先行研究を参考に「がん患者と家族へ療養場所の意思決定に関する話をするときどのように行ったか」「その時に気になったことや言いづらいこととそれをどのように説明したか」「現在の職務に就くにあたり、困ったことは何か」「構築を望む看護師への教育体制」「他の職種へ依頼したいこと」など。 結果：6名の参加者に面接調査を実施した。現在、逐語録作成を終了しており、今後質的に分析を進めていく。</p> | | | | | |

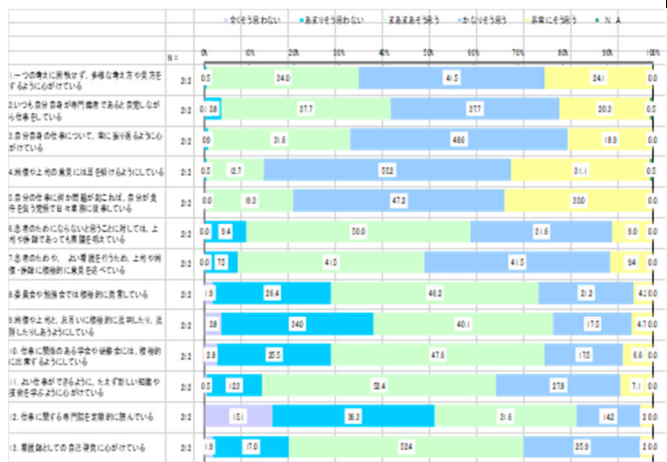
※ 次ページに続く

研究実績
の概要

調査2：入退院調整に必要な看護師のコンピテンシーに関する研究

【方法】対象：研究対象者は、看護師として働いており、退院調整に携わった①入退院支援センター及び病棟での退院調整を実施している看護師 合計 600 名とする。対象施設は、全国の総合病院を無作為に 200 施設抽出し、無記名自記式質問紙を各病院 3 部郵送、回収は郵送法とする。調査内容：独立変数：基本属性・「専門職者行動」および「入退院支援学習ニーズ」、分析は全体及び各項目間の記述統計とした。

【結果・考察】回収数 212 部（回収率 35%）、平均年齢 45 歳（28-63）、97%が女性であった。看護師免許のほかにケアマネジャーの資格取得者は 30%であった。入退院支援を行う上で、学習すべき内容は、「患者・家族が退院後の生活をイメージすることができるような説明の方法」「介護支援専門員や地域の各専門職との情報共有の仕方」「退院後に必要となるサービスや支援に関する情報提供」といった情報共有に関する内容が上位を占めていた。「患者・家族が納得した退院ができたか」を評価するための退院後の患者・家族とのかかわり方」「患者の自己効力感を高める方法」「自分の行った退院支援の自己評価方法」は、下位を占めていたが、コンピテンシーとして不要ではなく、既に身に付けていると考える。今後、専門職者行動と学習ニーズの関連を分析していく。



成果資料目録

1. 終末期がん患者の意思決定を支える看護師の退院調整に関する国内文献の検討と今後の課題：第 34 回日本がん看護学会学術集会 示説発表 2020